

日韓の女子大学生の国際交流意識とキャリア形成の比較：

お茶の水女子大学の国際意識調査から

加賀美 常美代

問題の所在と研究目的

お茶の水女子大学（以下、お茶大と略す）では、2005年から毎年、入学時に国際意識調査を継続して行っている。これまで実施した調査は、2005年4月、2006年1月、2006年4月、2007年3月、2007年4月とほぼ同様の内容で5回の調査を実施してきた。

まず、加賀美・箕浦・三浦・篠塚（2006）は、2005年4月に入学した学部新入生を対象に、入学時点で国際協力や多文化間交流への関心やキャリア意識を知り、「グローバル文化学環」のカリキュラムづくりに反映させるために、第1回の国際意識調査を行った。その新入生498名を対象にした調査では、グローバル文化学環の教育内容に関心の高い学生群と中程度の学生群、低い学生群に分類し、国際教育・キャリア育成プログラムの参加動機と学習動機、理想的自己観、多文化理解態度、キャリア志向、社会イメージとの関連を検討した。その結果、グローバル文化学環に関心の高い学生群は、①国際教育・キャリア育成プログラムへの参加動機、学習動機が高い、②理想的自己観については、専門性と視野の広さ、好奇心、社会貢献、異文化交流、社会への発信力、社会的影響力を重視している、③多文化理解態度については、相手文化尊重、判断保留、共同体意識、言語と文化学習重視、協働性、積極的傾聴を重視している、④キャリア志向については、開発途上国や国連など海外の国際組織での就職を目指している。このように、グローバル文化学環に関心の高い学生は、教育内容に高い期待と明確なキャリアイメージを持って入学していることが認められた。

箕浦・加賀美・小柳・三浦・篠塚（2006）は、2005年4月に入学した学部新入生と別途調査をした2年生を対象に、30代前半の自己のキャリア形成について尋ねたところ、「専業主婦をしている」との選択が一番強いクラスターとして出現しており、卒業後のキャリアをあまり考えていない学生たちがいることが示された。このような学生が新入生に23%、2年生にも23%もあり、大学の2年間で弱キャリア志向者が減少したわけではないことを指摘している。

第2回の国際意識調査では、加賀美・篠塚（2007）は、2005年に入学した学生で、入学してから9ヵ月後の2006年1月末に必修科目を履修していた1年生を対象（対象170名）に、グローバル文化学環の関連科目を履修したか否かを聞き、2005年4月に行った質問項目と同じ内容で国際意識調査を行った。グローバル文化学環関連の講義科目の受講数、または受講か非受講かを分析軸とし検討した結果、講義受講と国際教育プログラムの参加動機や学習動機との関連が高く、また、受講者は非受講者より、多文化理解態度の多様性、判断保留、言語文化重視の態度が強い傾向が見られた。また、異文化交流重視の理想的自己観を持ち、国際キャリア志向を持つ人ほど受講数が多い傾向が見られた。さらに、理想的自己観に注目

し学習動機、多文化理解態度などとの関連要因について検討した結果、異文化交流重視の理想的自己観を持つ人は、30歳代前半のキャリア像も国際型キャリア志向を持つ傾向が見られ、弱キャリア（「専業主婦」、「自分で起業すること」）を志向しない傾向が示された。つまり、異文化交流重視の価値を持つか持たないかで将来のキャリアが二分され、グローバル文化学環関連の受講の有無も決定されることが示された。

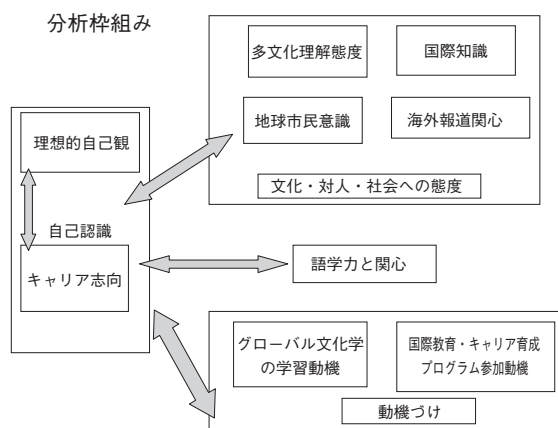
2006年4月の入学時に行った第3回の国際意識調査では、篠塚・加賀美（2007）は、おもに属性とキャリア形成について検討しており、30歳代前半のキャリア像として学生が描く内容は、学部によって差があることを示した。キャリア形成を求めず、30歳代の自分の姿に専業主婦あるいは専業主婦に付随したパート・アルバイト就労などの非正規雇用を描いている学生が、入学時の学生の約3割も存在することが認められた。特に3学部でもっともキャリア形成希望が高かった理学部では、2006年の4月の調査において3学部で専業主婦希望が最も高いという矛盾した現象がでていることが明らかにされた。

このように、これまで行った3回の国際意識調査からは学生たちの国際交流意識や国際教育の参加動機、将来の自己キャリア形成に関して、さまざまな視点から分析されているが、国際社会の中でのお茶大生の国際交流意識がどのようなものか、国際比較を通して検討する必要があると考えた。そこで、本研究は2007年3月に実施した韓国ソウルの4つの大学に新入学した女子大学生（4回め調査）と2007年4月に入学したお茶の水女子大学の新入生の国際意識とキャリア形成についての調査（5回目調査）の比較検討を目的とする。

なぜ、韓国の女子大学生を調査対象としたかについては、韓国は日本における留学生数が第2位であり（お茶大の留学生数も上位2位）、学生集団として考えると日本と関連が深く大きな位置を占める。また、急速に韓国社会がグローバル化しており、日本と同じように、儒教の伝統的意識を持つ隣国の女性の意識が日本とどのように異なるか日韓の女子大学生の国際交流意識とキャリア形成を比較検討することは、日本の女子大学生（お茶の水女子大学生）の国際意識をより深く考察できるという点で意義深いと考えるためである。

本調査は、特に仮説を設定していないが、これまでの調査結果で認められた重要な変数を比較することにする。全体的な分析枠組みは次のとおりである（図1）。

図1 本研究の分析枠組み



方法

1. 本研究に関連する尺度、質問項目

本研究に関連する項目は、学生の興味関心、国際知識、国際教育・多文化間交流に関する学習意欲、国際教育・キャリア育成プログラムへの参加意欲、理想的自己観、多文化理解態度、30歳代前半の理想的キャリア像（以下、キャリア志向とする）、海外報道への関心、英語力や外国に関する関心などの項目群である。韓国版については、日本語版を韓国語に翻訳した後、バックトランスレーションによって妥当性を確認した。

2. 質問紙調査実施

質問票は、韓国ソウルでは諸般の事情で無作為抽出はできなかったが、2007年3月に大学に入学した女子大学生（ソウル市立大 71、梨花女子大 321、高麗大 46、瑞逸大 9）に、入学直後の最初の授業時（主に、日本語履修者）に配布、回収を依頼した。日本はお茶の水女子大学に2007年4月に入学した1年生を対象に入学式に質問票を配布し、回収する方法をとった（注1）。その結果、韓国では4大学448名の女子大学生、日本はお茶大1校で469名の有効回答を得た。質問票は2005年4月の質問票とはほぼ同じ内容で、お茶大、日本に特化した項目については、多少の変更を加えた。調査目的は、お茶大については、新入生の国際協力や多文化間交流の意識を知り、国際理解教育及びグローバル文化学環のカリキュラムや授業運営の参考にするためであること、韓国ソウルについては、日韓の相互理解を深めるために比較を検討したい旨を添え、プライバシーの厳守を明記した。

3. 参加者

参加者の年齢については、韓国は平均19.9歳で、日本は18.2歳である。所属大学、学部は表1のとおりである。韓国については、4大学のうち梨花女子大が71.7%を占め、学部は法学部、経済学部、政経学部が149名でお茶大にはこれらの学部はない。また、理学部や工学系が少ないのも特徴であった。このように収集された参加者データにおいて若干の偏りが見られた。

表1 対象者の所属学校と所属学部

() 中は%

| | |
|---|--|
| 韓国 (n = 448) | |
| 所属学校名：ソウル市立大 71 (15.8) 梨花女子大 321 (71.7) 高麗大 46 (10.3) 瑞逸大 9 (2.0) | |
| 無回答 1 (0.2) | |
| 所属学部 | |
| 文系関連：a. 文科大学 48 (10.7) b. 人文科学大学 137 (30.6) c. 社会科学大学 21 (4.7) d. 法科大学 35 (7.8) e. 経営大学 79 (17.6) f. 政経大学 14 (3.1) g. 師範大学 36 (8.0) h. 教養教職学部 - (-) i. 言論学部 - (-) j. 国際学部 9 (2.0) | |
| 理系関連：k. 理科大学 1 (0.2) l. 工科大学 12 (2.7) m. 自然科学大学 4 (0.9) n. 生活環境大学 1 (0.2) o. 情報科学大学 - (-) p. 情報通信大学 - (-) q. 生命科学大学 1 (0.2) r. 医科大学 - (-) s. 看護科学大学 1 (0.2) t. 看護大学 - (-) u. 保健科学大学 3 (0.7) v. 薬学大学 - (-) | |

| |
|---|
| 芸術関連：w. 美術学部 - (-) x. 造形芸術大学 8 (1.8) y. 芸術大学 9 (2.0) z. デザイン大学 7 (1.6) a. 音楽大学 9 (2.0) B. 体育科学大学 1 (0.2) d. 公演芸術大学 - (-) その他大学 9 (2.0) 無回答 3 (0.7) |
| 日本 (n = 469) 所属学校名：お茶の水女子大学 所属学部・学科 ①文教育学部 218 (46.5) : a. 人文科学科 62 (13.2) b. 言語文化学科 86 (18.3) c. 人間社会科学科 43 (9.2) d. 芸術・表現行動科学科 27 (5.8) ②生活科学部 130 (27.7) : a. 食物栄養学科 34 (7.2) b. 人間・環境科学科 22 (4.7) c. 人間生活学科 73 (15.6) ③理学部 121 (25.8) : a. 数学科 20 (4.3) b. 物理学科 20 (4.3) c. 化学科 22 (4.7) d. 生物学科 23 (4.9) e. 情報科学科 35 (7.5) |

結果

1. 国際知識への関心度

(1) 因子分析

日韓の女子大学生の国際知識を含めて興味関心の方向性はどのような構造をもっているか、まず、因子分析（主成分分析、バリマックス法）を行ったところ、以下の6因子の関連領域が見出された。第1因子は、アメリカやヨーロッパ、アジア、アフリカの文化、経済や生活習慣などを示す5項目から成るため、「外国文化社会」と命名した。第2因子は、途上国支援や地球規模の問題解決などを示す3項目で、「国際開発」と命名した。第3因子は、日本国内の社会問題を示す3項目で、「日本社会問題」と命名した。第4因子は、自分の進路や成績などを示す2項目で「学業進路」と命名した。第5因子は恋愛や結婚、ファッションなどを示す2項目で「自分と趣味」と命名した。第6因子は国内外の旅行に関する項目で「旅行」と命名した。

表2 国際知識への関心の因子分析

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|--------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| アメリカやヨーロッパの映画や音楽、美術や文学 | 0.765 | -0.121 | 0.066 | -0.006 | 0.0236 | 0.201 |
| アジアやアフリカ、中南米の映画や音楽、美術や文学 | 0.751 | 0.0675 | -0.056 | -0.076 | -0.005 | 0.1262 |
| アメリカやヨーロッパの政治や経済・社会問題 | 0.636 | 0.3577 | 0.1249 | 0.2372 | 0.0116 | -0.24 |
| アジアやアフリカ、中南米の政治や経済・社会問題 | 0.617 | 0.5139 | 0.028 | 0.0962 | 0.0146 | -0.187 |
| 世界の様々な国民や民族の生活様式や習慣 | 0.614 | 0.2984 | -0.044 | -0.045 | -0.093 | 0.3166 |
| 発展途上国の貧困や人口爆発、教育や保健衛生など | 0.1716 | 0.799 | 0.0495 | 0.0136 | -9E-04 | 0.0782 |
| 民族紛争や戦争、テロによる世界平和の危機 | 0.1195 | 0.747 | 0.1457 | 0.0485 | -0.051 | 0.0727 |
| 地球温暖化や環境汚染などのエコロジー | 0.003 | 0.709 | 0.2463 | -0.058 | 0.0425 | 0.0968 |
| 日本での増税や年金問題 | 0.0526 | 0.0645 | 0.868 | 0.0501 | 0.0603 | -6E-05 |
| 国内の失業、フリーターなどの雇用・就労問題 | 0.0422 | 0.1227 | 0.801 | 0.2221 | -0.104 | 0.0518 |
| 日本の少子化問題 | -0.057 | 0.2832 | 0.699 | -0.012 | 0.1592 | 0.0921 |
| 自分の学業成績 | -0.013 | -0.03 | 0.0869 | 0.825 | 0.0687 | 0.1082 |
| 卒業後の進路 | 0.0236 | 0.0469 | 0.1034 | 0.78 | 0.0592 | 0.0626 |
| ブランド品やファッション | 0.0329 | -0.01 | 0.0126 | -0.085 | 0.876 | 0.0419 |
| 自分や友人の恋愛や結婚 | -0.056 | -1E-04 | 0.0824 | 0.2864 | 0.771 | 0.0943 |
| 日本各地への旅行 | 0.0439 | 0.1469 | 0.1112 | 0.023 | 0.0904 | 0.81 |
| 世界各地への旅行 | 0.3006 | 0.0268 | 0.0152 | 0.2782 | 0.0648 | 0.638 |

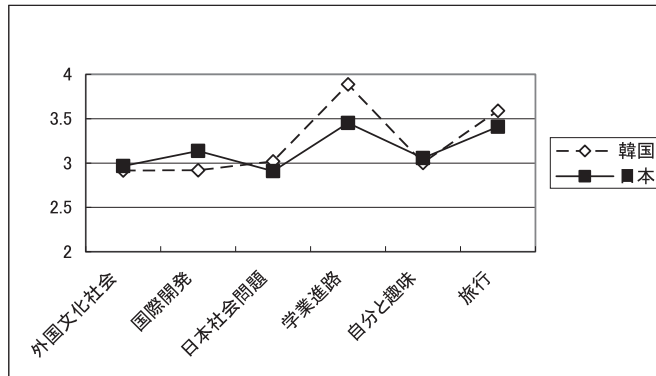
因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

(2) 日韓比較

これらの因子を日韓で比較検討するために、因子ごとにt検定を行った。その結果、日韓によって有意差が見られなかった因子は、「外国文化社会」の因子 ($t=-1.371$, $df=912.029$, $p=n.s.$) と「自分と趣味」の因子 ($t=-1.244$, $df=914$, $p=n.s.$) であった。これらは日韓の女子大学生たちに共通する領域といえる。一方、日韓によって有意差が見られた因子は、「国際開発」の因子 ($t=-5.703$, $df=913.093$, $p<.001$)、「日本社会問題」($t=2.727$, $df=913.333$, $p<.01$)、「学業進路」($t=15.694$, $df=914$, $p<.001$)、「旅行」($t=5.083$, $df=867.075$, $p<.001$) の因子であった。日本学生のほうが韓国学生より関心が高かった因子は、「国際開発」領域のみであった。それ以外の「日本社会問題」「学業進路」「旅行」の3因子については、韓国学生のほうが日本学生より関心が高かった。とりわけ、学業進路への関心は高く学歴重視志向が背景にあるといえる。日本社会問題についても韓国学生のほうが関心が高く、日本語の語学授業時にデータを収集したとはいえ皮肉な結果である。

図2 国際知識の関心



2. グローバル文化関連の関心

(1) グローバル文化関連の関心

グローバル文化関連の関心については、大学の状況によって異なるため、韓国では「グローバル文化関係の教育内容に関心がありますか?」と聞き、日本では、「グローバル文化学環の教育内容に関心がありますか?」とした。その結果、以下の様な回答が得られた。

表3 グローバル文化関連の関心

() 中は%

| | ① 非常に 関心がある | ② かなり 関心がある | ③ 少し 関心がある | ④ あまり 関心がない | ⑤ 全く 関心がない | 無回答 |
|----|----------------|----------------|---------------|----------------|---------------|---------|
| 韓国 | 161 (35.9) | 180 (40.2) | 79 (17.6) | 20 (4.5) | 2 (0.4) | 6 (1.3) |
| 日本 | 69 (14.7) | 59 (12.6) | 219 (46.7) | 108 (23.0) | 13 (2.8) | 1 (0.2) |

表3のように韓国学生は、90%以上がグローバル文化関係の教育について何らかの関心を示し、「非常に」、「かなり」関心を持つものだけでも70%を超えていた。一方、日本学生は何らかの関心を示すものを含めると70%であり、「非常に」、「かなり」関心を持つものは、27.3%だけであった。このように、韓国学生のほうが日本学生よりこの学問領域に圧倒的に関心が高いことを示している。

3. 国際教育プログラムへの参加動機

国際教育・キャリアプログラム（企画行事や教育支援活動など）への参加意欲については、日韓で状況が違うために、韓国では、「次の国際関係の研修や活動がもしあなたの大学にあるとしたら、あなたはどの活動に参加したいですか」と聞き、日本では、「お茶大が企画している研修や活動で、参加したいものがあれば該当するものに○をつけてください」と聞いた。その結果、すべてのプログラムにおいて、日本学生より韓国学生のほうが参加意欲が非常に高い傾向が見られた。特に、韓国学生は、「留学生との日常的な交流やサポート活動」、「海外語学研修」、「協定校への交換留学」は、「参加してみたい」という希望が80%を超えており、非常に積極的な交流意識が認められた。一方、日本学生は、最も多く回答した「海外語学研修」が51%であり、ほかのプログラムは50%に満たなかった。

表4 国際教育・キャリアプログラムの参加意欲

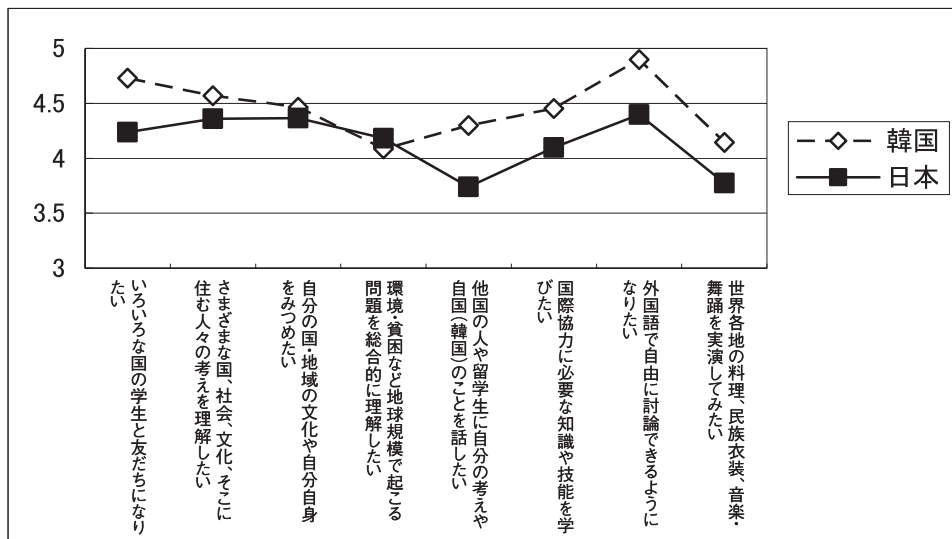
() 中は%

| | ①参加してみたい | ②検討してみたい | ③関心がない | 無回答 |
|---------------------------------|------------|------------|------------|---------|
| 留学生との日常的な交流やサポート活動 | | | | |
| 韓国 | 391 (87.3) | 50 (11.2) | 6 (1.3) | 1 (0.2) |
| 日本 | 198 (42.2) | 207 (44.1) | 56 (11.9) | 8 (1.7) |
| アフガニスタン女子教育支援プログラムの講演会参加・募金活動など | | | | |
| 韓国 | 119 (26.6) | 242 (54.0) | 86 (19.2) | 1 (0.2) |
| 日本 | 97 (20.7) | 263 (56.1) | 106 (22.6) | 3 (0.6) |
| 海外語学研修 | | | | |
| 韓国 | 417 (93.1) | 24 (5.4) | 6 (1.3) | 1 (0.2) |
| 日本 | 242 (51.6) | 141 (30.1) | 84 (17.9) | 2 (0.4) |
| 私費による開発途上国への研修旅行 | | | | |
| 韓国 | 76 (17.0) | 257 (57.4) | 113 (25.2) | 2 (0.4) |
| 日本 | 66 (14.1) | 215 (45.8) | 186 (39.7) | 2 (0.4) |
| 日韓交流セミナー | | | | |
| 韓国 | 306 (68.3) | 119 (26.6) | 22 (4.9) | 1 (0.2) |
| 日本 | 115 (24.5) | 218 (46.5) | 134 (28.6) | 2 (0.4) |
| 留学生との交流合宿 | | | | |
| 韓国 | 352 (78.6) | 78 (17.4) | 17 (3.8) | 1 (0.2) |
| 日本 | 187 (39.9) | 186 (39.7) | 94 (20.0) | 2 (0.4) |
| 協定校への交換留学（英国、中国、韓国、オーストラリアなど） | | | | |
| 韓国 | 409 (91.3) | 34 (7.6) | 4 (0.9) | 1 (0.2) |
| 日本 | 208 (44.3) | 161 (34.3) | 98 (20.9) | 2 (0.4) |
| 私費による語学留学 | | | | |
| 韓国 | 205 (45.8) | 203 (45.3) | 37 (8.3) | 3 (0.7) |
| 日本 | 86 (18.3) | 209 (44.6) | 171 (36.5) | 3 (0.6) |

4. グローバル文化関連の学習動機

次に、グローバル文化関連の学習動機についての日韓の違いを分析した。図3のとおり、t検定を行ったところ、「環境・貧困など地球規模で起こる問題を総合的に理解したい」($t=-1.870$, $df=914$, $p<.10$)という項目のみ、日本学生は韓国学生より学習意欲が高かった。これは、日本学生は、地球規模、グローバル社会というマクロレベルで学術的に世界の問題を見ようとしていることが伺える。それ以外の項目、「いろいろな国の学生と友だちになりたい」、「さまざまな国、社会、文化、そこに住む人々の考えを理解したい」、「自分の国・地域の文化や自分自身をみつめたい」、「他国の人や留学生に自分の考えや自国（韓国）のことを話したい」、「国際協力に必要な知識や技能を学びたい」、「外国語で自由に討論できるようになりたい」、「世界各地の料理、民族衣装、音楽・舞踊を実演してみたい」のすべての項目において、韓国学生のほうが日本学生より有意に積極的な傾向が見られた。中でも「外国語で自由に討論できるようになりたい」という国際言語伝達力と「いろいろな国の学生と友だちになりたい」という国際交流意識は非常に高い傾向にあり、韓国学生は国際的な実践力を求めている。

図3 日韓学生のグローバル文化関連の学習動機の違い



5. 外国語に関する能力、関心

図3で示すとおり、日韓学生はともに「外国語で自由に討論できるようになりたい」という学習意欲が非常に高い傾向があった。それでは、実際に彼女らはどの程度、語学力を持ちあせているのであろうか。「日常会話ができる外国語（母語以外の言語）はいくつありますか。」という質問項目については、表5のような回答が示された。1ヶ国語以上できる人は韓国の学生では60%以上であったが、日本の学生は31%であった。

表5 日常会話ができる外国語（母語以外の言語）数 () 中は%

| | ①なし | ②1ヶ国語 | ③2ヶ国語 | ④3ヶ国語以上 | 無回答 |
|----|------------|------------|-----------|----------|---------|
| 韓国 | 165 (36.8) | 183 (40.8) | 85 (19.0) | 10 (2.2) | 5 (1.1) |
| 日本 | 320 (68.2) | 138 (29.4) | 7 (1.5) | 1 (0.2) | 3 (0.6) |

また、「英語以外に習うことに関心のある外国語がありますか。」という質問に対しては、韓国では「ある」と答えた人が95.8%であったものの、日本の学生は76.8%であった（表6）。

表6 英語以外の外国語の関心 () 中は%

| | ①ある | ②ない | 無回答 |
|----|------------|-----------|----------|
| 韓国 | 429 (95.8) | 9 (2.0) | 10 (2.2) |
| 日本 | 360 (76.8) | 69 (14.7) | 40 (8.5) |

さらに、現在の英語の語学力について「あなたの現在の英語での会話力（聞く・話す）は、以下のどれに該当するか」という質問に対しては、「意思の疎通に困らない」、「相手の言うことが相手の言うことがだいたい理解でき、自分の言いたいことがだいたい伝えられる」と答えた人は、韓国学生は42%、日本では21%であった（表7）。

表7 英語による会話力 () 中は%

| | | ①意思の疎通に困らない。 母語を100%とすると、 70%以上 | ②相手の言うことが だいたい理解でき、 自分の言いたいことが だいたい伝えられる。 50%～70% | ③片言で何とかやり取りできる。 20%～50% | ④ほとんどコミュニケーション できない。20%以下 | 無回答 |
|----|---------|---------------------------------------|---|----------------------------|------------------------------|---------|
| 韓国 | (n=448) | 33 (7.4) | 156 (34.8) | 224 (50.0) | 30 (6.7) | 5 (1.1) |
| 日本 | (n=469) | 10 (2.1) | 91 (19.4) | 291 (62.0) | 77 (16.4) | - (-) |

このように外国語に関する関心や外国語での日常レベルでの伝達力、英語伝達力も韓国学生のほうが圧倒的に積極的であり、語学能力における自己評価も高いことが認められた。

6. 理想的自己観

それでは、韓国学生と日本学生が持つ理想とする自己観はどのようなものだろうか。表8のとおり、理想的自己観は12項目から構成される尺度であり、将来、なりたいた自分の理想像を描く価値観である。そ

のうち、「正義感が強い人」「上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人」「社会的に力のある人」「好奇心が旺盛で向上心がある人」「人の意見に素直に合わせられる人」「社会や人のために役に立つ人」「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」「人と社会に関するメッセージが伝えられる人」という9つの理想的自己観について有意差が認められた ($p<.05$)。とりわけ、韓国学生のほうが有意に高かったのは、「正義感が強い人」「社会的に力のある人」、「人の意見に素直に合わせられる人」「社会や人のために役に立つ人」「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」「人と社会に関するメッセージが伝えられる人」の6項目であった。一方、日本学生は韓国学生より「上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人」「好奇心が旺盛で向上心がある人」の2項目において、有意に高かった。このように、韓国学生は、正義、社会的パワー、社会貢献、同調、異文化重視など対人、対社会の価値において高く、社会との接点に積極的であり対人関係を重視する傾向が見られた。一方、日本学生は理想的自己の対等性、好奇心などかなり自己の内面に関心をもつ傾向が見られ、両者に違いが見られた。

対照的に、有意差が認められなかった項目は、「専門知識が豊富で視野が広い人」、「社会の常識や規律を重視する人」「自分で判断し行動する人」であり、これらの3項目は、日韓の学生集団にとって共通性の高い項目といえる。

表8 日韓学生の理想的自己観の差異

| | | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |
|-----------------------------|----|------|----------|------|
| 専門知識が豊富で視野が広い人 | 韓国 | 4.54 | (0.67) | |
| | 日本 | 4.5 | (0.62) | |
| 正義感が強い人 | 韓国 | 4.03 | (0.77) | * |
| | 日本 | 3.9 | (0.89) | |
| 上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人 | 韓国 | 3.92 | (1) | ** |
| | 日本 | 4.27 | (0.82) | |
| 社会的に力のある人 | 韓国 | 3.76 | (0.9) | ** |
| | 日本 | 3.42 | (0.95) | |
| 好奇心が旺盛で向上心がある人 | 韓国 | 4 | (0.87) | ** |
| | 日本 | 4.44 | (0.64) | |
| 人の意見に素直に合わせられる人 | 韓国 | 3.96 | (0.87) | ** |
| | 日本 | 3.28 | (0.97) | |
| 社会の常識や規律を重視する人 | 韓国 | 3.45 | (0.93) | |
| | 日本 | 3.42 | (0.89) | |
| 社会や人のために役に立つ人 | 韓国 | 4.39 | (0.7) | ** |
| | 日本 | 4.24 | (0.83) | |
| 異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人 | 韓国 | 4.47 | (0.68) | ** |
| | 日本 | 4.22 | (0.81) | |
| 自分で判断し行動する人 | 韓国 | 4.43 | (0.76) | |
| | 日本 | 4.52 | (0.64) | |
| 人と社会に関するメッセージが伝えられる人 | 韓国 | 4.2 | (0.78) | * |
| | 日本 | 4.08 | (0.82) | |
| 規則に縛られず自由な生き方ができる人 | 韓国 | 3.46 | (1.05) | |
| | 日本 | 3.63 | (0.91) | |

さらに、表9のとおり、理想的自己観で「自分が最も大切だと思う項目は何か」という質問に対しては、韓国学生の上位3位は、「専門知識が豊富で視野が広い人」「自分で判断し行動する人」「社会や人のために役に立つ人」であった。日本学生は「無回答」「自分で判断し行動する人」「好奇心が旺盛で向上心がある人」であった。共通する点は、「自分で判断し行動する人」であり、自立の価値が高かった。一方、韓国学生は「専門性」を追求しているのに対し、日本学生は「無回答」が最も多く、ついで「好奇心」を重視している点が差異として明確に示唆された。これは、大学入学時において日本学生は自分の価値や将来を意識していない人が多い一方、韓国学生は大学に専門性を求めている、高校卒業の段階でキャリア形成を日本学生よりはるかに意識している傾向が見られた。

表9 理想的自己観：自分が最も大切だと思う項目

() 中は%

| | 韓国 | 日本 |
|-----------------------------|-----------|------------|
| 専門知識が豊富で視野が広い人 | 87 (19.4) | 33 (7.0) |
| 正義感が強い人 | 11 (2.5) | 14 (3.0) |
| 上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人 | 30 (6.7) | 42 (9.0) |
| 社会的に力のある人 | 18 (4.0) | 11 (2.3) |
| 好奇心が旺盛で向上心がある人 | 26 (5.8) | 73 (15.6) |
| 人の意見に素直に合わせられる人 | 30 (6.7) | 1 (0.2) |
| 社会の常識や規律を重視する人 | 4 (0.9) | 7 (1.5) |
| 社会や人のために役に立つ人 | 71 (15.8) | 45 (9.6) |
| 異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人 | 31 (6.9) | 13 (2.8) |
| 自分で判断し行動する人 | 79 (17.6) | 100 (21.3) |
| 人と社会に関するメッセージが伝えられる人 | 24 (5.4) | 14 (3.0) |
| 規則に縛られず自由な生き方ができる人 | 14 (3.1) | 13 (2.8) |
| 無回答 | 23 (5.1) | 103 (22.0) |

7. 多文化理解態度

多文化理解態度は、「もしあなたが様々な国の人と一緒に仕事をするとしたら、どのようなことが重要だと思いますか。」という質問に対して、回答する14項目から成る尺度である(表10)。韓国学生と日本学生で有意差が認められた項目は、「異なる文化のもとでは相手の文化の価値観を尊重し合わせられる(相手文化尊重)」、「多様な価値観があっても行動基準の判断に「公正」を第一に置く(公正)」、「人間関係が上手くいかない時、感情的にならず冷静に対応できる(冷静)」、「反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける(積極的傾聴)」、「誤解が生じ失敗しても、冗談を言ったり笑ったりできる(冗談)」、「自国のなじみ深い伝統や文化を尊重する(自文化尊重)」、「考え方の違う人々の間でもリーダーシップをとり企画を進める(企画力)」、「意見の違いがある時、自分と相手の妥協点を探ることができる(妥協)」、「いろいろな言語や文化を学ぶことを重視する(言語文化学習重視)」であった。そのうち韓国学生がより重視する項目は、相手文化尊重、公正、冗談、自文化重視、妥協、言語文化学習重視であった。一方、日本学生が重視する項目は、冷静さや企画力などリーダーシップであった。韓国の学生のほうが日本学生に比べ、自・他の文化の調整や言語能力の重視、公正観を示す態度など個人の資質を重視している傾向が見られた。一方、日本学生は多文化での人間関係の葛藤対処の際の冷静さ、管理力やリーダーシップなど集団の調整を重視している傾向が見られた。

表 10 日韓学生の多文化理解態度の違い

| | | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |
|-------------------------------|----|------|----------|------|
| 文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる | 韓国 | 4.54 | (0.59) | |
| | 日本 | 4.57 | (0.63) | |
| 異なる文化のもとでは相手の文化の価値観を尊重し合わせられる | 韓国 | 4.61 | (0.55) | ** |
| | 日本 | 4.26 | (0.82) | |
| 意見の違いがある時、賛成・反対の判断を保留することができる | 韓国 | 3.95 | (0.77) | |
| | 日本 | 3.85 | (0.84) | |
| 年齢や職位の上下関係にはあまりとらわれない | 韓国 | 3.74 | (0.94) | |
| | 日本 | 3.7 | (0.89) | |
| 多様な価値観があっても行動基準の判断に「公正」を第一に置く | 韓国 | 4.24 | (0.74) | ** |
| | 日本 | 3.69 | (0.83) | |
| 共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる | 韓国 | 4.04 | (0.86) | |
| | 日本 | 4.12 | (0.78) | |
| 人間関係が上手くいかない時、感情的にならず冷静に対応できる | 韓国 | 4.09 | (0.91) | ** |
| | 日本 | 4.44 | (0.68) | |
| 反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける | 韓国 | 4.54 | (0.71) | ** |
| | 日本 | 4.72 | (0.54) | |
| 誤解が生じ失敗しても、冗談を言ったり笑ったりできる | 韓国 | 4 | (0.93) | * |
| | 日本 | 3.88 | (0.89) | |
| 自国のなじみ深い伝統や文化を尊重する | 韓国 | 4.34 | (0.74) | ** |
| | 日本 | 4 | (0.85) | |
| 考え方の違う人々の間でもリーダーシップをとり企画を進める | 韓国 | 3.93 | (0.94) | ** |
| | 日本 | 4.13 | (0.79) | |
| 意見の違いがある時、自分と相手の妥協点を探ることができる | 韓国 | 4.64 | (0.57) | ** |
| | 日本 | 4.36 | (0.74) | |
| いろいろな言語や文化を学ぶことを重視する。 | 韓国 | 4.65 | (0.58) | ** |
| | 日本 | 4.31 | (0.72) | |
| 共通の目標に向かって協力して問題解決ができる | 韓国 | 4.68 | (0.56) | |
| | 日本 | 4.65 | (0.54) | |

8. 将来のキャリア

理想的キャリア志向（以下、キャリア志向とする）については、「30歳代前半（30歳から35歳）の自分の姿を思い描いて、そうありたい自分に該当する項目に○をつけなさい。」という質問である。その回答は表11のとおり16項目から構成される。日韓で有意差が見られた項目は、国際キャリア志向に関連する項目で、「外資系や国際的企業の海外関係部門」、「開発途上国支援を主な業務とする組織の職員」、「国連などの国際的組織の職員」、「海外の大学院への留学」、「ボランティアとして国際・地域貢献をしている」、「上記に該当しない仕事を海外で行なう」であった。これらは韓国学生のほうが高得点であった。また、「芸術や芸能の分野で活躍する」、「自分で起業している」などの自由型キャリア、「幼小中高または専門学校

で教員として働く」、「国家公務員・地方公務員として働く」などの公職型キャリア志向も、韓国学生のほうが高い傾向にあった。一方、有意差が見られなかった項目は、「企業で一般事務職として働く」「企業でプログラマーなど専門技術職として働く」「大学などの研究に従事する」などの一般事務、専門職を志向する人で、これらは日韓学生の共通性といえよう。

表 11 日韓学生の将来のキャリア志向

| | 韓国・日本別 | 平均値 | 標準偏差 | t 検定 |
|---------------------------|--------|-------|-----------|------|
| 企業で総合職として働く | 韓国 | 2.072 | (0.751) | ** |
| | 日本 | 1.935 | (0.742) | |
| 企業で一般事務職として働く | 韓国 | 1.316 | (0.546) | |
| | 日本 | 1.359 | (0.559) | |
| 企業でプログラマーなど専門技術職として働く | 韓国 | 1.478 | (0.688) | |
| | 日本 | 1.425 | (0.656) | |
| 外資系や国際的企業の海外関係部門で働く | 韓国 | 2.481 | (0.67) | ** |
| | 日本 | 1.618 | (0.72) | |
| 開発途上国支援を主な業務とする組織の職員として働く | 韓国 | 1.699 | (0.736) | ** |
| | 日本 | 1.495 | (0.663) | |
| 国連などの国際的組織の職員として働く | 韓国 | 2.198 | (0.787) | ** |
| | 日本 | 1.505 | (0.673) | |
| 芸術や芸能の分野で活躍する | 韓国 | 1.811 | (0.812) | ** |
| | 日本 | 1.554 | (0.733) | |
| 大学や研究所などで研究に従事する | 韓国 | 1.716 | (0.736) | |
| | 日本 | 1.706 | (0.739) | |
| 幼小中高または専門学校で教員として働く | 韓国 | 1.624 | (0.778) | ** |
| | 日本 | 1.497 | (0.673) | |
| 国家公務員・地方公務員として働く | 韓国 | 1.835 | (0.783) | * |
| | 日本 | 1.728 | (0.732) | |
| 海外の大学院へ留学している | 韓国 | 2.325 | (0.695) | ** |
| | 日本 | 1.472 | (0.65) | |
| ボランティアとして国際・地域貢献をしている | 韓国 | 1.889 | (0.721) | ** |
| | 日本 | 1.642 | (0.669) | |
| 自分で起業している | 韓国 | 1.718 | (0.789) | ** |
| | 日本 | 1.256 | (0.519) | |
| 上記に該当しない仕事を海外でやっている | 韓国 | 1.79 | (0.766) | ** |
| | 日本 | 1.315 | (0.555) | |
| パート・アルバイト・フリーター・派遣社員として働く | 韓国 | 1.166 | (0.444) | ** |
| | 日本 | 1.05 | (0.227) | |
| 専業主婦をしている | 韓国 | 1.09 | (0.345) | ** |
| | 日本 | 1.334 | (0.549) | |

以上のとおり、多様なキャリアにおいて、概して韓国学生は日本学生に比べ、キャリア志向が高い傾向が見られたが、日本学生が唯一、韓国学生より高得点だった項目は、「専業主婦をしている」という項目であった。

この結果を詳細に見るために表12を参照すると、韓国学生は、30歳前半で専業主婦をしていることに「関心がない」と回答した人は、91.5%であり、日本学生は69.8%である。対照的に、「専業主婦に強く、または可能であればなりたい」と回答した韓国学生は7.2%、日本学生は29%であった。このように日本学生は、韓国学生に比べ専業主婦志向が高いことが明らかになった。これは弱キャリアが3割程度いるという2005年からの調査の数値とほぼ一致しており（箕浦・加賀美ほか,2006; 篠塚・加賀美, 2007）、日本の女子学生が高校卒業までの間に、学校や社会、家庭を通して社会化され、専業主婦志向が培っていくものとみなしてよいと思われる。

表12 将来のキャリア志向：日韓学生の専業主婦志向

() 中は%

| 専業主婦をしている。 | ① 望強く希 | ② りそあ可 たうれ能 いなばで | ③ ない関 心 | 無 回 答 |
|------------|-----------|---------------------------|---------------|-------------|
| 韓国 | 8 (1.8) | 24 (5.4) | 410 (91.5) | 6 (1.3) |
| 日本 | 18 (3.8) | 118 (25.2) | 325 (69.3) | 8 (1.7) |

9. 国際型キャリア志向と関連要因

国際型キャリア志向はどのような要因にどの程度、関与しているのでしょうか。また、日韓ではどのように違うのでしょうか。

国際型キャリア志向に関連する項目は、「外資系や国際的企業の海外関係部門」、「開発途上国支援を主な業務とする組織の職員」、「国連などの国際的組織の職員」、「海外の大学院への留学」、「ボランティアとして国際・地域貢献をしている」、「上記に該当しない仕事を海外で行なう」の6項目であるが、これらを総合して平均した得点を「国際型キャリア」の得点とした ($\alpha = .87$)。

関連変数については、箕浦・加賀美ほか(2006)の調査分析では、「外国の文化社会・政治経済」、「国際開発」、「世界市民意識」、「エンパワーメント（自分の力で世の中を変えられる）」、「海外報道への関心」、「国際知識」、「英会話力」の7変数が国際キャリア志向の25%を説明できることが示されている。

表13 エンパワーメント（地球市民意識）

() 中は%

| 自分の力で世の中を変えられる。 | ① 変えられる | ② ある程度変えられる | ③ あまり変えられない | ④ 変えられない | |
|-----------------|------------|----------------|----------------|-------------|---------|
| 韓国 | 62 (13.8) | 255 (56.9) | 115 (25.7) | 14 (3.1) | 2 (0.4) |
| 日本 | 27 (5.8) | 142 (30.3) | 213 (45.4) | 81 (17.3) | 6 (1.3) |

表 13 のとおり、日韓学生のエンパワーメント度は韓国学生の 70% 以上の学生が「世の中を変えられる」と思っているのに対し、日本学生は 36% しか変えられると思っていないことが明らかになった。このような社会への制御感においても韓国のほうがはるかに高得点であることが示された。

そこで、本分析では国際型キャリア志向を従属変数とし、独立変数に新たに「理想的自己観」や「国際教育プログラムの学習動機」を加え重回帰分析を行うこととした。理想的自己観は、学生にとって大学生活を送る際の道標にもなり、進路決定においても重要であると考えたからである。その結果、「外国社会文化」への関心、「国際開発」への関心、「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」という理想的自己観、「外国語で自由に話したい」「国際協力に必要な知識や技能を学びたい（国際協力の知識と技能）」という学習動機、「英会話力」、「エンパワーメント度（自分の力で世の中を変えられる）」、「海外報道への関心」の 8 項目を投入し、国際型キャリア志向に対する影響力を重回帰分析で推定することにした。独立変数が未確定ではあるが、ステップワイズ法を用いて最適なモデルを探った結果、表 14、表 15 のように示された。

表 14 韓国学生の国際型キャリアの間連要因

| | β | t | 有意確率 | R^2 |
|-----------------|---------|-------|-------|-------|
| (定数) | | 1.256 | 0.21 | 0.243 |
| 国際協力知識や技能への学習意欲 | 0.286 | 6.356 | 0.000 | |
| 海外報道への関心 | 0.163 | 3.569 | 0.000 | |
| 国際開発 | 0.135 | 3.037 | 0.003 | |
| 英会話力 | 0.109 | 2.481 | 0.013 | |
| エンパワーメント度 | 0.087 | 2.036 | 0.042 | |

従属変数：国際型

表 15 日本学生の国際型キャリアの間連要因

| | β | t | 有意確率 | R^2 |
|-----------------|---------|-------|-------|-------|
| (定数) | | -3.92 | 0.000 | |
| 国際協力知識や技能への学習意欲 | 0.227 | 4.658 | 0.000 | 0.382 |
| 海外報道への関心 | 0.222 | 5.367 | 0.000 | |
| 国際開発 | 0.151 | 3.638 | 0.000 | |
| エンパワーメント度 | 0.12 | 3.115 | 0.002 | |
| 外国語での討論への意欲 | 0.15 | 3.338 | 0.000 | |
| 異文化重視の理想的自己観 | 0.088 | 2.154 | 0.032 | |

従属変数：国際型

重回帰分析の結果、国際型キャリア志向を規定する関連要因については、次のとおりである。韓国学生は「外国社会文化」への関心、「国際開発」への関心、「国際協力に必要な知識や技能を学びたい（国際協力の知識と技能）」という学習動機、「英会話力」、「エンパワーメント度（自分の力で世の中を変えられる）」、「海外報道への関心」という 5 要因であり、その 5 要因で 24.3% が説明されることが示された（表 13）。

表 14 のとおり、日本学生は、「国際開発」への関心、「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」という理想的自己観、「外国語で自由に話したい」「国際協力に必要な知識や技能を学びたい

い（国際協力の知識と技能）」という学習動機、「エンパワメント度（自分の力で世の中を変えられる）」、「海外報道への関心」6要因であり、その6要因で38.2%が説明されることが示された。

日韓で異なる点は、日本学生のほうが「異文化交流重視」の理想的自己観に基づいて、「外国語で自由に話したい」という学習意欲がキャリア志向に影響していることである。一方、韓国学生は「外国社会文化」への関心、実際の英語力が国際キャリア志向に影響している傾向が示された。日韓で共通する点は「国際開発」への関心、「国際協力に必要な知識や技能を学びたい（国際協力の知識と技能）」という学習動機、「エンパワメント度（自分の力で世の中を変えられる）」、「海外報道への関心」が国際キャリア志向に影響していることが明らかになった。

このように、日韓学生の国際キャリア志向には、多少の違いはあるものの概して共通な要因が影響している傾向が見られた。

総合的考察と今後の課題

本研究は、2007年3月にソウルの4つの大学に入学した女子大学生と2007年4月にお茶の水女子大学に入学した学生の国際意識とキャリア形成について比較検討したものである。今回の調査では、ソウルの4つの大学の女子大学生とお茶大生という限られた対象者であり学部も若干の偏りがあるため、一般化は避けたいと思うが、本調査の限りでは、国際交流意識、キャリア意識ともに、日本学生（お茶大生）より韓国学生（4つの大学の女子大生）のほうが格段に積極的であったことがデータから支持された（注3）。筆者は、韓国留学生と日常的に接しており経験的に彼らの積極性を身近に感じていたため、それが留学生独自のものか日韓の文化的差異によるものか、かねて疑問に思っていた。しかし、韓国内の大学生でも同様の傾向が示されたことは、文化的差異を示す興味深い結果となった。

具体的には、第一に、日韓学生のグローバル文化学関連への関心、国際教育・キャリアプログラム（語学研修、企画行事、教育支援活動など）への参加意欲については、日本学生より韓国学生のほうが非常に高い意欲を持つ傾向が見られた。また、外国語に関する関心や外国語での日常レベルでの伝達力、英語伝達力も韓国学生のほうがより高く自己評価をしていることも認められた。

このように、韓国学生の海外向きの国際交流意識の高さは、学歴社会を背景とする国の教育力や国際人材育成の価値が後押ししているともいえる。加賀美（2004）は日本、韓国、中国の学生の教育価値観の比較調査をしたところ、教育価値観の一領域である理想的教育観の「国際的視野」次元に関して、韓国学生は日本、中国の学生群に比べ突出して価値を置くことを示した。これは韓国の通貨危機などで国内就職率が低下したという社会経済的要因や「教育の世界化」を民族の新たなビジョンとして掲げている（全、1996）ことが挙げられる。さらに、海外留学の関心が高く、韓国の学歴社会が持つ強い上昇志向から国際化への価値指向が強く生み出されたのではないかと考えられる（加賀美、2004）。

このように、韓国学生は実際に運用できる外国語能力や多文化の友人交流を求めるのに対し、日本学生は、韓国学生より「国際開発」に関心が高く「地球規模で起こる問題を総合的に理解したい」というように地球・世界という包括的な関心が強い傾向が見られた。これは、日本学生というよりお茶大生に入学した学生が人口問題、環境問題などの地球規模の危機とその問題解決を学究的に学びたいという学術・包括的なレベルでの学習意欲が高い傾向を持つのではないかと考えられる。

第二に、日本学生に比べ韓国学生のほうが多文化交流や友人形成を強く求める傾向が強く、異文化間の

対人関係においても積極性が認められたことである。これは、異文化間コミュニケーションの授業（参加型の留学生と日本人学生の交流授業）後にインタビューによる質的分析を行った研究（加賀美, 2006）でも、日韓学生の親密化過程の認識が異なる様相が見られており、このことから説明できる。韓国留学生の場合には、自己開示によって親密度が高くなっていく過程をたどっており、「自己開示の共通性や互恵性」が友人形成や交流に大きく影響しているといえる。一方、日本学生の場合には、留学生を傷つけたらいけないという不安や先入観が初期にはあるものの、時間をかけた留学生との愉快的接触体験により不安が低減され、「他者との類似性」が認識されて親密になっていくという過程をたどっていった。このことから、韓国学生の対人関係は積極的な自己開示から始まり、それを他者と共有し、さらに相互に自己開示を行うという、自らの「積極性」が根底にあるといえる。一方、日本学生は、相手との類似性という「安全な対人関係」が維持されるかどうか、時間をかけて見極めてから関係構築が始まるため、多文化間交流においても他者中心的で「消極的」な態度となってしまうのではないかと考えられる。

第三に、30歳代前半のキャリア意識について、韓国学生は日本学生に比べ、国際キャリア型だけでなく、「芸術や芸能の分野」、「起業」という自由型キャリア志向、「教員」、「国家公務員・地方公務員」という公職型キャリア志向など、全般にわたりキャリア意識が高く、就職に対して非常に積極的な傾向が見られ、「専業主婦」には関心をほとんど示さなかった。

それでは、韓国学生と日本学生のキャリア獲得に対する積極的な態度の違いは、なぜ生じているのだろうか。上述したように、韓国社会や就職状況など外的な状況とも関連するが、筆者は韓国学生の「社会に対する認識の仕方」が、日本学生と異なることが一因ではないかと考える。これは、韓国学生が、「自分の力で世の中を変えられる」という意識（エンパワーメント度）が70%以上であったのに対し、日本学生は36%しか「変えられる」と思っていなかったことから説明が可能である。「自分の力で世の中を変えられる」と思う学生は、躓きや多くの困難があってもあきらめずに挑戦できるが、「自分で変えられない」と思う学生は、困難な事態に直面した場合、挑戦しないであきらめてしまうことになるだろう。日本学生は、「自分で社会を制御できない」と思うがゆえに、能動的にキャリア獲得をしなくてもよい「他者依存的な」専業主婦という進路選択になってしまうのではないだろうか。

それでは、どうして3割近くの日本学生が専業主婦志向となるのであろうか。それは、高校卒業までの日本の社会、家庭、学校による社会化の過程で自然に身につけ形成されてきたものと考えられる。その要因として、一つには伝統的な理想的主婦像である育児、家事に主体的に価値を求めていることも考えられる。これは身近なロールモデルである母親が専業主婦であることも考えられる。その一方で、女性が男性と互角に働いても報われない社会的現実や自分の趣味や生活、子育てを犠牲にしてまでキャリアに固執しないという消極的な労働回避的な選択（棕野, 1998）も考えられる。さらに、将来の自分を描けない理由として、パートナー（結婚相手）次第で自分の進路を変更するかもしれないという未確定要素が彼女らの弱キャリア意識を形成しているようにも思えてならない。このことは、今後インタビューなど質的調査により明らかにしていく必要がある。

このように、日本学生が韓国学生に比べ、概して国際交流意識、キャリア形成意識の両方において消極的であるばかりでなく、30歳代前半において3割の学生が専業主婦志向を容認していることが2005年から継続して示された。今後の課題は、こうした弱キャリアの学生に対し、大学入学時から卒業時まで学生自身が自分の将来をみつめ適性を考え、女性としてどのように進路選択を行っていくかという積極的な自己選択を促すキャリア形成教育の必要性が急務とされる。また、グローバル文化環境の提供する留学生と

の交流授業、国際教育プログラムに積極的な参加を促すことによって、全体的な国際交流意識の底上げ（加賀美・箕浦ほか，2006）を行うとともに、学生の現実変革への志向性を高めていく必要があるだろう。そのためには、グローバル文化学環のプログラムや異文化接触体験がどのように受講生のキャリア意識に影響を与えているか、さらなる質的調査と詳細な分析を行う必要があろう。

注

（注1）2005年から5年間、国際的な場で活動する人材育成のため、国際教育プログラムが文部科学省の特別研究教育経費を得て進行している。文教育学部では学部共通の進学コースとして「グローバル文化学環」が創設され、その授業科目は全学部生が副専攻として受講できるようになった。本調査はその研究経費により実施されている。

（注2）質問票の配布と回収については、韓国の高麗大学の宋恵仙先生、梨花女子大学の金志宣先生に韓国の入学直後の授業終了時に配布と回収を依頼した。それに対し関係する非常勤の諸先生方がご快諾くださった。また、加賀美研究室の大学院留学生（朴志仙さん、沈貞美さん、朴貞玉さん、朴エスターさん）にも翻訳、配布、回収、資料整理など協力してもらった。関係者には書面を通して心より感謝申し上げたい。

（注3）本研究の対象者は、日本はお茶大生1校で韓国は4大学であるため、比較検討の際には暫定的に日本学生、韓国学生というカテゴリー名称で分析した。

参考文献

- 全文楽（1996）. 第八章 韓国—儒教の国の現代教育— 石附実（編） 比較国際教育学【補正版】 東信堂 146～162.
- 加賀美常美代（2004）. 教育価値観の異文化間比較—日本人教師，中国人学生，韓国学生，日本人学生との違い— 異文化間教育，19， 67-84.
- 加賀美常美代（2006）. 大学における異文化間コミュニケーション教育と多文化間交流 日本研究，6， 高麗大学校日本学センター， 107-135.
- 加賀美常美代・箕浦康子・三浦徹・篠塚英子（2006）. グローバル文化学に関心のある学生はどのような学生か？: 新入生国際意識調査から 人文科学研究，2， 246-265.
- 箕浦康子・加賀美常美代・小柳志津・三浦徹・篠塚英子（2006）. 大学教育とキャリア形成 - 入学時と2年終了時のお茶の水女子大学生の調査から - 人文科学研究，2， 229-224.
- 加賀美常美代・篠塚英子（2007）. 大学生の国際交流意識とグローバル教育 - お茶の水女子大学の場合 人文科学研究，3， 175-190.
- 篠塚英子・加賀美常美代（2007）. グローバル社会への関心と女子学生のキャリア志向—お茶の水女子大学生の調査〈第2回〉から 人文科学研究，3， 159-174.